Angel Beats! とりあえずやってみるきゃないしょっ!!

銀色緑茶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ａｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓ！　とりあえずやってみるきゃないしょっ！！

【Ｎコード】
Ｎ１５０６Ｕ

【作者名】
銀色緑茶

【あらすじ】
死んだ後の世界で一人の少女は天使と呼ばれる、立華奏と出会う。
一人の少女と天使　奏が織り成すボケと突っ込み
死んだ世界戦線をも巻き込みカオスとかす戦場。
その中で彼女達は何を成すか知るは神のみ。

注※粗筋と本編は全く違います
オリジナル要素が入ります。

こんなのＡＢじゃない、天使じゃないという方は回れ右してお戻り下さいませ。

作者は文才無し＆ａｍｐ；更新極遅です
それでも良いという方はお入り下さいませ。

申し訳ないです
作者はスランプに陥りました
復旧までもう暫くお待ち下さいませ
ｍ（＿＿）ｍ
７／１８　加筆

◆事の始まり（前書き）

初書きになります。
宜しくお願いします
m（_ _）m

◆事の始まり

◆霧島ユリア◆

死んだ世界にやってきたらしい。
うん、私死んだってさ。
……なんだって！？！？！？！？

ふっと目を覚ますと目の前に広がる満面の星空だった。
ダルげに体を起こし、寝起きでボーっとする頭を軽く左右に振って
意識を覚醒させる。
あれ？何でこんな所で寝てるの？
最初に思った疑問はこれだった。
辺りを見回すと見た事ない光景が広がる。
後ろを見るとそれなりに大きい建物がある。
正面を見ると少し降りた所にグランドがある。
ここは何処？
少なくともここは自分が知っている場所ではない。
自分の記憶は悪い方ではないと自負しているが流石に知らない所は
分からない。
とりあえずこの場所から動く事にした。
この場で頭を抱えて悩んでも仕方ないしね。

少し歩いてみるとグランドへ降りる階段に着く。
グランドへ降りてみる事にした。
このグランド広いなぁと思いつつブラブラしていると

「そこの貴方。」

急に声を掛けられ、少し驚きつつ私へと呼び掛けたであろう声の主を探し直ぐ見つけた。
声の主は女の子だった。
私と同じ位か1つ下かなと思う。
女子平均身長より少し低い。
何より彼女の無表情が余計に幼く見えた。
なにかを抑えそれを外に出さないようにするかのように思えた。
彼女が歩いて近付く度、月の光を浴びて輝く白い髪が揺れて綺麗だなぁと思ったのは秘密だ。

「野外活動の活動可能時間を過ぎている。」

彼女に見惚れて惚けていると、彼女は首をかしげる。
その仕草にドキッとする。
！！！……可愛い／／／
脳内妄想はバラ色で絶賛鼻血が流血中だ。
まるでひ〇らしのレナのお持〇帰りぃぃぃ状態である。

「…大丈夫？」

妄想に浸る余り目の前の彼女を蚊帳の外にした上に心配されると言う始末。
そんな自分に自己嫌悪に陥りつつ

「うん。大丈夫…大丈夫だから」

安心させるように微笑み掛けると彼女は少し安心した表情を見せる。

「…そう。」

よく見ると顔も可愛い。
瞳の色が金色でまるでお月様みたいだ。
また妄想に入り掛けた時、

「ここで何をしているの？」

ハッ！？
我に還ると彼女は不思議そうな顔をしながら私の顔を見つめてくるではないか。
グハァッ！？
霧島ユリアの精神に１０００のダメージ。
この子マジかわいい。可愛い過ぎるぞ？！！？
よろめき顔を押さえる。

「大丈夫！？」

さっきとは変わらない声音だが声質が若干焦りの交じったものに変わる。
当然だろう。
話している相手が急に顔を押さえ呼吸を荒くしているのだから。
慌てるのも当然だろう。
あれ？私変態じゃね？
…おかしい。
こんな筈じゃなかったのに…
ｏｒｚのポーズで膝を突いた。

「…本当に大丈夫？？？」

突然ｏｒｚのポーズで膝を突いた私に驚きと戸惑いと心配をする彼女は私の肩に恐る恐る手を伸ばし置いた。

ちなみに彼女は中腰体制である。
彼女の白い聖領域が見えそ（ｒｙ
その手が妙に暖かくて涙が出そうになった。

「…大丈夫、心配してくれてありがとう」

ゆっくりと立ち上がり、こんな邪な事を考えている自分が酷く嫌なものに思えた。
顔に微笑を張り付け大丈夫と言う。
彼女はまだ心配そうにしていたものの話しを続ける事にしたようだ。
それにほっとしつつ彼女の言葉を待つ。

「それでここで何していたの？」

私はこれまでの経緯を話した。
起きてみたら知らない場所にいて、ここは何処だろうと思いフラフラと探索していたらここに着いたと説明した。
彼女は黙って私の話を聞いている。
私が話し終えると彼女はふ…と短いため息を吐いた。
そして私にとって驚愕の事実が伝えられた。

「貴方は死んだの。ここは死んだ後の世界。」

そして冒頭へ戻る。

◆事の始まり（後書き）

更新はまったりと逝きます。
では、また次回。

ユリア≫続きなんてあるの？
作者≫考えてない（^^；　だって勢いで書いちまったんだよぉ！！？（泣）
天使≫……（ブスッ）
ユリア≫ああ…潰れたトマトのようだ…（笑）

※スタッフが美味しく頂きました。

◆白き魔女降臨す（前書き）

オリ主のプロフを

◆霧島ユリア◆

日本人の父とドイツ人の母より産まれた日独人のハーフ。

容姿は母の血を濃く受け、アルビノと呼ばれる白い肌に白に近い銀髪、瞳は血のような赤い色。

まさに絶世美少女と呼ばれる程だった。

性格面では父の血が強く出ている。

手はとても器用で並大抵の事は素っ気なくこなす。

身長約１６０くらい

体重　秘密

年齢　１７

性別　女

一人称　私、自分、ユリア

とりあえず以上です。

では、続編どうぞー

◆白き魔女降臨す

◆ユリア◆

どうやら彼女の名前は立華奏というらしい。
音を奏でるかいい名前だなぁとのほほんとしていると彼女は私の袖を引っ張り

「貴方の名前は？」

そういえばまだ名乗ってなかったっけ。

「私はユリア、霧島ユリアだよ。よろしく、奏」

彼女、奏を下の名前で呼んでいるのは奏って呼んでもいい？って言ったら奏はあっさり頷いたからだ。
奏も私を下の名前で呼び合う仲になっている。

少し時間を遡る事１２時間前、奏からグランドで衝撃！？的なカミングアウトで精神ダメージ５０００を受けた時の事。
貴方は死んでこの世界に来たと告げられ、嘘だッ！とひぐら○のレ○のような叫びにも似た事を叫び、それを証明してくれと言った所見事な殺陣？で心臓を一太刀され、絶命した。
その後、奏が保健室らしき所へ運んでくれて寝かしてくれたらしい。
翌日目を覚ましたらベッドに寝ている事に気付き、覚醒した頭が昨日の事を思い出し体を慌てて起こし胸を押さえると血や傷らしきものはなく何だ夢かと悪夢を見たよと苦笑していると妙に赤い物体が目に入った。
嫌な予感がしつつ、それを持ち上げると血だらけになった衣服だと

確認するや否、悲鳴を上げそれを地面に放り投げる。
数分位それを見つめながら放心していると自分が何も身に付けてない全裸だという事に気付く。
あわあわと慌ててベッドにあるシーツを体に巻き付け即席の衣服とした。
周りを見回すと血だらけとなった衣服しかない。
流石にこれは着たくないよぉと涙目になる。
保健室の中を見回しても衣服らしきものが無かった。
仕方なくシーツを和服風ドレスにアレンジし下着は布の切れ端を当てただけのものを着けた。
無いよりはマシである。

とりあえず保健室を出て、昨夜会った彼女に会う事にした。
彼女に刺されて殺されたとはいえ、私が証明しろと言ったのだからそれが些か強引な方法だったとはいえ彼女は悪くはないのだ。
彼女を恨むのは（多少恨みもなくないが）逆恨みである。
兎に角、彼女を敵として認識していない。
彼女で変な妄想をした罰だと思っておく。

保健室らしい所から出て少し歩くとどうやらここは学校らしい。
チラホラと学生服を身に着けた男女生徒の姿を確認出来た。
そういえば昨日着てた服ってさっき通り過ぎた女子生徒の制服と一緒だったなと今になって思い出した。
昨日出会ったあの子も同じ制服だったっけ。
だとしたらこの学校にいるのは間違いなさそうだ。
そうすると聴き込みをした方がいいか。
でも今の格好は十分妖しい（誤字ではなく）。
自分で言うのも何だかなと思うがなかなかの出来だと思う。
一枚のシーツで簡易式とはいえドレスを作ったのだ。
自分の腕が恐ろしい…

内心で悪役がやるような高笑いをするのだった。

◆日向◆

俺は目の前を通り過ぎた女の子にふっと目がいった。
ここでは見る事はない白いドレスを纏う女の子。
一瞬にして思考が止まる。
この場所には場違いな存在感を放ちながら辺りに溶け混んでいる。
まるで最初からそこに居るかように。
その違和感をそれ程感じさせないくらいにその女の子は美しいと思った。
ハッとして辺りを見回すとその女の子の姿はなく、日向が一人だけ立っていた。

◆白き魔女降臨す（後書き）

私の好きなキャラの内の一人、日向を出してみました。
勿論原作？ＴＶ版通りの日向×ゆいのカップリングはそのままです。
何となく日向は動かし易そうなので使ってみました。
チャラいな日向…だがそれが良いｗ
日向とゆいのカップルでいつかは出したいですね。

今回はこのぐらいにて
次話はいつになるか分かりません。
近い内にまた出すかも知れません。
では、またーノシ

◆天使と白き魔女（前書き）

連続投稿だヒャホーイッ！！
ハイなテンションで書き続けたせいか死ぬぅぅぅｏｒｚ
いや、自分でも予想外です。
連続投稿何て…今日は急遽休みになったので余計に…そして明日も休みだヒャホーッ！！
でも、雨なんですよね…。

まあ、兎に角続編どうぞー。

◆天使と白き魔女

◆ユリア◆

意外と呆気なく昨日のあの子は発見出来た。
ただ状況があまり宜しくない。
彼女は銃を持った男の子達に囲まれている。
うん、何だコレッ！？
近くあった茂みに身を隠しつつ、何この状況？？？と内心突っ込みながら様子を見ると、彼等は今朝（ほぼ昼前）見た青い髪の少年と同じ制服を着ているようだ。
肩にＳＳＳという腕章？みたいなものがあるし、間違いないだろう。
うーん…この状況は不味いよね。
一対複数か…多勢に不勢。
まともにやりあっても勝機はないし、何かいい手はないか。
考えるのポーズをとりながら何か名案を考える。
ふっと目を向けると消火器を発見する。
うん。使えるかも知れない。
近くにあった消火ホースを持てるだけ持ち、気付かれないように彼等の足元付近に伸ばす。
幸い敵対している彼女に集中しているせいか私の存在に気付いていない。
消火器を２つ持ち、１つは栓を開け、もう１つは彼等に放り投げる。

◆死んだ世界戦線◆

天使と戦闘中、白い人影と赤い何かを見た気がした。
赤い何かに思わず拳銃で撃ちまったんだ。
そしたらそれが爆発して辺りを白い煙で覆われた。

一瞬にして視界を白く埋め尽くされる。
何だか粉ぽいものも降っている気がする。
それが晴れてくると目の前にいた筈の天使の姿はなく、いつの間にか有った消火ホースに足を捕られて躓いている戦線メンバーがいた。
赤いヤツはどうやら消火器だったようだ。
消火ホースは水を巻き散らしながら今だに暴れている。
野田のヤツは顔面に消火器を受けて気絶しているらしい。顔面には消火器の後がくっきり残っていた。
それにしても目の端に映った白い人影はなんだったんだ？と冷静に自分の姿を観察し溜め息を吐いた。
この場に戦線メンバーは全員、白い粉だらけだった。

◆ユリア◆
やったぁー作戦成功ッ！！
あそこまで上手くいくとは予想外だった。
消火器で即席の煙幕を作り、その間に彼女を助け一緒に逃げる予定だった。
まさか投げた消火器を拳銃で撃ち抜き爆発するとは、これは嬉しい誤算だ。
あくまで囮で本命は彼女の前に立ち、消火器を彼等にばら蒔き目潰しする作戦だったが、姿を見せずに彼女を助け出せたのは幸運だったと言えよう。
多少なりの被弾は覚悟していたけどやっぱり痛いのは嫌じゃない？
この世界では死なないとはいえ痛いものは痛いんだしね。
彼女を連れて逃げる前に消火ホースに水を入れるのも忘れない。
アレ痛いんだよね地味に
膝とか膝とか膝とか…
流石に男の子でも弁慶の泣き所を連続で打たれると怯むでしょ？
狙った訳じゃないけど、精々躓くなりしてくれればその間に逃げれると思う。

まあ、微妙な賭けだったんだけどね。

彼女を連れて２０分程走った。
いつの間にか校舎内に入っていたようで辺りにはさっきの銃を持った男の子達の姿はなかった。
しばらく様子を見ても追手や新たな敵の姿はない。
ふーっと溜め息を吐き、空き教室に入って休みを取る事にした。
今更気付いたがずっと手を握ったままだった。
慌てて手を離すとごめんと謝った。
彼女はじぃーと私の顔と自分の手を見つめ、時々手を握ったり開いたりしていた。
そんなに痛かったのだろうか。
私がそんな事を考えていると

「確か…貴方は昨日の…」

彼女は何か言って声が小さくなっていく。
最後はゴニョゴニョと聞き取れない程だ。

「やあ、昨日ぶりだねー。」

とりあえず気にしない事にして、聞きたい事を聞こうと思う。

「まあ、挨拶はそこそこにして聞きたい事があるの。いいかな？」

彼女はコクッと頷く。
それを確認してさっきの奴等の事、何故あんな事になっていたか、昨日の武器みたいなものは何かと色々聞いてみた。
分かった事は彼女は生徒会長である事。
さっきの奴等は色々と問題児だと言う事。

生徒会長としての職務を真っ当しているだけだと言う事。
昨日の武器については何も話したがらないようだったので追及するのは止めた。
そこでフッと思い出した。
彼女の名前を知らないという事を。
自分とした事がと内心苦笑を浮かべる。
名前を知らずに探そうとしていたとは余りにも愚策だ。
仕方ないと言えば仕方ないが。
昨日、今日で会ったばかりなのだから。

「ところで君の名前、教えてくれないかな？」

彼女はキョトンした表情になる。
その表情に思わずかわいいと思って食べたくなったのはそこの君と私の秘密だ。
彼女は何かを考えるような表情をし、ほんの一瞬の間だったが微笑んだような気がした。
直ぐに無表情に変わったが。

「…立華奏」

そう彼女、立華奏は言ったのだった。

◆天使と白き魔女（後書き）

えっと、まあ察して下さい（泣）
どうせどうせ私なんか私なんかぁぁぁ
作者クオリティは限りなく低い酷いです。
戦闘シーン何て…ｏｒｚ

消火器とホースの話は捏造です。
爆発するのかは知らないです。
だったら良いなぁと思い妄想で投げました。
まあ爆発シーンがなければもっと悲惨だったですけどｗ
消火器の粉で目潰し…痛そうですね…。

さて、次話はガルデモの話でも書こうかと…
一応、予定ではですがｗ
では、またーノシ

◆白き魔女は伝説となる（前書き）

連続投稿だぜっ！
予告通りに出せなかった…ｏｒｚ
ガルデモが出るのはもう少し先ですかね。
筆を進める程、作者の暴走が酷くなってる気がする……

続編どうぞー。

◆白き魔女は伝説となる

◆ユリア◆

何なんだろうね？
私は男の子達に囲まれている。
何と言うかアレですなぁ。
ムサイ、熱い、ウザイ。
うん、今の私からの精一杯の実況だ。
何でこんな事になっているかと言うとやっぱりアレのせいだろうか。

―回想中―
何となく暇だったんだ。
奏と一緒でも良かったんだけどね。
奏から授業を受けろとの事で授業を受けていた訳だがどうも簡単過ぎてスラスラと問題を解いていったら全教科を制覇してしまった。
僅か3日で…。
ちなみに私は女子寮に住んでいる。
部屋は空いているとの事で奏に頼んで用意して貰った。
それと現在の服装は、例のアレである。
割と着心地良かったので、後で強化してちゃんとした服となっていた。
教師は当初はアレコレと言って来たが全教科制覇してしまってから黙認するようになった。
奏は時々制服着させようしていたが半ば諦めたのか最近はあまり言って来ない。
それが、ここ二週間程の私の出来事である。
おっと、目の前の光景が熱いせいか現実逃避していた。

そう、あれはあまりに暇で奏の髪をイジってポニテ、ツインテ、お団子、三編み等々の髪型を作って遊んでいた。
彼女の制止を聞かず、軽く流していたのが今思うと悪かったのだろう。
奏は三度目の制止兼警告を発する。
私はそれをスルーした。
今だしつこく奏の髪と戯れていた私に奏は実力行使に出た。
何となく想像がついただろう。
そう、奏は例の武器を使用し、私の心臓にブスッと刺したのだ。
この世界で二度目の死を迎えたのだった（一度目の死に方と同じ）。
私はそのまま膝を突いて地面に倒れた。

―３０分経過―
意識を取り戻した私は体を起こす。
いやはや、見事な突きでしたなぁ。
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
その後ずっと奏に謝り続けた。
奏は流石に殺り過ぎたと思ったのか許してくれた。
ちなみに奏は私が倒れた後、芝生まで運んでくれて膝枕して介抱してくれた。
天使マジ天使ぃぃぃ！！
妙に柔らかいと思ったのは奏の太ももだったのかー…
わぁーい、役得だー！
流石にこれ以上セクハラを続けたら関係を拗らせるので自重した。
ルパ〇ダイブしたら流石に刺されるよね…。

フッと辺りを見るとアレ？何かこの間奏を襲っていた男の子達に囲まれていた。
およそ２０人…この間より増えてる。
ここにいる全員がＳＳＳの腕章がついた制服を着ている。

つまり彼等は敵。
私はそう判断した。
理由はどうあれ女の子一人に対して大勢で押し寄せるのは頂けない。
奏にアレコレ理由を聞いた時、彼女はそれは仕方ないと漏らしていた。
その顔はとても辛そうに見えた。
だからなのか私はこの子を守りたいと思ったのは。
この不器用で脆い少女を。
私は奏を庇うように前に立った。
後ろからえ…？ユリア？と奏の声が聞こえたがスルーする。
彼等は私の存在に今気付いたかのように驚きが広がっている。
やがてそれも落ち着くと

「彼女に手を出すなら容赦はしない」

私がそう彼等に聞こえる大きくもなく小さくもないドスを効かせた声で言う。
若干怯んだようだが、相手は所詮女の子一人（奏は別）と油断しているようだ。
一人の男の子が近付いて、危ないよ？離れた方いいよ？と言ってきた。
私は彼の言葉を無視した。
彼はそれに少し苛立ったのかさっきよりか言葉を荒げながら私の腕を掴んだ。
私は黙って彼を見つめた。
睨んだのではない、見つめたのだ。
彼はビクッとして私の腕を離すとそそくさと仲間達の元に戻った。
仲間達はどうした？とか何で何処かに連れて行かなかったんだ？と責められている。
彼は一瞬私を見るともう一度ビクッとしてプルプル震えている。

尋常じゃない怯え方に仲間達に動揺が走る。
そして、彼等の中から刀らしきものを持った男の子が出てきた。
彼は黙って私と対峙する。
一瞬の間。
勝負はあっという間に着いた。
彼は私に向かって、刀を振るった。
それを避け、手刀を彼の首に当て意識を刈り取る。
彼は地面に膝を突き、起きてくる気配は無かった。
次の相手は誰？という視線を相手に向ける。
男の子達は皆、私の視線から目を逸らす。
その中には視線を外さず逆に見返す子もいた。
その子は仲間達が道を開けた所から悠々と出てくる。
そうしてこう言った。

「女、中々腕が立つようだな。俺と勝負しろ」

そういうや否、彼は長い棒の先に斧みたいなものを軽々と振り回す。
彼の動きを観察する。
なかなかやるなぁと口元をニヤリと歪ませる。
両者とも対峙する。
さっきの相手より長く見つめ合う。
他の子達も邪魔する気がない。
もしくは巻き添えを恐れて近付かない。
チラッと奏の方を見るといつもの無表情だが心配しているようだ。
私は目で大丈夫と伝えるとわかったというようにコクッと頷いた。
それに満足し彼と対峙する。
先に動いたのはどっちだったかほぼ同時に動いた。
私は全力を込めた手刀を。
彼は棒の刃先を突き出した。
リーチの差で彼の攻撃が早くもダメージを与えた。

私は身を捩り、直撃は避けたが脇腹を掠めた。
血が滲み出る。
それ程の怪我ではないと判断し、戦闘に集中する。
今度はこっちからの先制だ。
側面から近付いて回し蹴りを繰り出した。
彼はそれを棒で防御したが体勢を崩し、たたらを踏んだ。
そのチャンスを使い、全力の手刀を彼の首に叩き込んだ。
彼はよろめきながらも立ち上がる。
そして、不敵の笑みを浮かべる。
多分私も同じ顔をしているのだろう。
次の攻撃で決める。
両者ともそう目で語っている。
私も脇腹の傷は深くはないが浅くもない。
現に血を流して意識が朦朧としている。
彼も見た目は何ともないが肩の骨は砕けている。
全力で放った一撃だ、少なくともひびは入る。
片手がブラーンとしている事から力が入らないのだろう。
両者とも睨み合う事数秒。
数時間位経ったかのような錯覚を覚える。
そして、同時に動いた。

◆白き魔女は伝説となる（後書き）

オリ主がどんどん人離れしていく…。
こんな筈じゃなかったのにー
戦線は最初印象が悪かったのもあってユリアにとって悪役の立ち位置ですね。
彼等の言い分も分からなくはないですけど、それで奏を不幸にするのは納得は出来ないです。
まだ解決策がない…考えてないってだけですけど悔しい思いです。

まあ、戦線メンバーから大山、藤巻、野田を出しました。
大山と藤巻はまあこんな感じでしょうw
野田は活躍させてみたかったのでユリアのライバル的な存在です（笑）

さて、基本まったり更新の筈が急ピッチに組み上げられたせいで予定の話を使い切ってしまいましたw
何も考えず欲望に忠実に書いたら余計駄文に拍車が掛かってしまって申し訳ないです。
すいません
m（＿＿）m
駄作者をお許し下さいませ。

さて、今回はこのくらいで
では、またーノシ

◆激戦と自爆と激辛麻婆豆腐（前書き）

皆様方、４日ぶりでありますっ！（≧ω≦）ゞ
日曜に話を構築、更新の予定でありましたが
おじぃさまに田んぼへ狩り出されてしまいましたぁぁぁ！！（泣）
雷が鳴る大雨の日に田植えぇぇぇーｏｒｚ
凄く疲れました…。
予定より遅くなってしまって申し訳ないです
ｍ（＿＿）ｍ

それでは、続編どうぞー。

◆激戦と自爆と激辛麻婆豆腐

◆ユリア◆

激闘の末、僅差で辛うじて勝利を納める。
ホント、ギリギリだった…
足を踏み出すのが一歩遅れていたら、倒れるのは私だっただろう。
彼は起き上がってくる様子はない。
私の入れた一撃は彼の首筋を捉え、彼の意識を奪うには十分過ぎる。
ボキッとかゴキッとか変な音が聞こえたけど、首は折れてない……はず。
精々首筋を痛めるくらい…？

彼との戦闘で思った以上に体力を使った。
脇腹から流れる血は止まったがまだズキズキと痛い。
左右に振らつく体にまだ倒れる訳にはいかないと渇を入れ、男の子達と向き直る。

◆大山◆

僕は目の前の光景に唖然とし、ある意味戦慄が走っていた。
今この場にいる戦線メンバーでも強い分類に入る藤巻君と野田君の二人がたった一人の女の子に殺られたのだ。
二人は武器を用いたのに対し、彼女は素手で藤巻君を瞬殺、野田君と互角の戦いを繰り広げた。
二人とも接近戦では強い。
天使に少し劣るが油断しなければ負ける事はない（ただ一度も勝った事はない）。

その二人が殺られたのは、この少女が少なくとも天使と同じ、或いはそれ以上の力を持っている事を意味する。

彼女は天使を庇うように前に立って、僕達を睨みつける。
絶対、間違いなく敵対視されている。
そう思うとなんだか凹んだ。
か弱くて守って上げたくなる系な女の子なのに、何でこんな可愛い子が強いのッ！？
世の中の理不尽を呪った。
絶望したっー！のポーズで頭を抱える。
傍にいた日向君が大山ッ！？大丈夫か！？と心配してくれたが、それに返す事も頷く事も出来ない。
戦闘が再開され、戦線メンバー達はそれぞれの武器を握り、日向君はまだ何か言ってたみたいだけど、メンバーに呼ばれて一度僕を一瞥するとその子に向かっていた。
僕は何も出来ず、その場に蹲るしか出来なかった。

◆ユリア◆

その後、こっちに向かって来る男の子達を次々に撃退し、再び起き上がらないように強めに手刀や蹴りを当てていく。
手刀を喰らい地面に倒れる者、蹴り飛ばされて転がって頭をぶつけた者、それに巻き込まれた者、それを避け自爆する者…などなどアホな光景が広がっていた。

「あはははは っ！！なにこれ、おもしろっｗｗｗ」

思わず、吹き出した。
笑い過ぎて脇腹が痛いんですけどｗｗｗ

今笑わないと後悔する。
ちょっ！？
涙で前が見えないんだけどッ！！
これが男の子達の作戦か…なかなかやるじゃないのｗ
（※彼等はガチでやってます）

男の子達は終盤付近で次々と自爆という形で戦闘を終了する。
彼等が再び起き上がってくるような気配はない。
そこで安心したのか（笑い過ぎて）張り詰めていた緊張が切れて限界を迎える。
まるで糸が切れた人形のようにその場で崩れ落ちそうになった時、誰かに抱きしめられた。
私は薄れゆく意識の中、ユリアのバカ…という声が聞こえたような気がした。

またまた保健室へ運ばれた私は数時間後、目を覚ました。
目を覚ますとジト目＆ａｍｐ；涙目で私を睨む奏がいた。
奏と楽しい楽しいＯ・ＨＡ・ＮＡ・ＳＨＩという名のお説教は６時間以上にも及んだ。

その後、たまたま手に入れた食券でお詫びに激辛麻婆豆腐を奢ると機嫌を治してくれた。
奏はこの麻婆豆腐が大好物のようだった。
奏本人は『あたし、麻婆豆腐好きなの？知らなかった…。』と語る。
その時の麻婆豆腐をレンゲで突つく姿はとっても可愛かった。
奏がレンゲを私の口の前に持ってきて、食べる？とアーンしてくれた激辛麻婆豆腐は美味しかった。
すっごく口が焼けた気がする……。

◆激戦と自爆と激辛麻婆豆腐（後書き）

我ながら酷い出来ですね……。
ううっ（ＴｏＴ）
文才欲しいよぉ！！！

今回の話しは前回の続きです。
戦線主要メンバーの戦闘力は大幅アップさせてます。
主にＴＶ版で前衛向きだった人達は特にパワーアップしました。
オリ主が奏ちゃんと同等かそれ以上というのは、ガードスキルがＴＶ版よりもの凄く少ないって事があります。
今はハンドソニック、ディストーション？、瞬間移動のアレだけです。
後々増える予定です。

今回はこのぐらいにてー
では、また次回ーノシ
次の更新は…自信はないので迷言しか吐けません。
まったりお待ち下さいませー
ｍ（＿＿）ｍ

◆ユイとガルデモとプレイガール？（前書き）

皆様、こんにちは。
今日も暑い日でしたね。
でも、今日は涼しいー
昨日は熱射病と脱水症状を起こして危なかったです。
小まめな水分補給は大事ですよw

さて、今回の話は、
ユイにゃん登場ですっ！
ガルデモも登場…少しだけですがw

では、続編どうぞー。

◆ユイとガルデモとプレイガール？

◆ユリア◆

校内をフラフラ徘徊していると、ピンク色の髪をした女の子が一生懸命背を伸ばして、チラシを壁に貼っていた。
微笑ましいなぁと頬が弛む。
爪先立ちでプルプルする様子は産まれたばかりの子鹿のよう。
…かあいいっ／／／
あっ…バランスを崩した。
シュッと近付き、後ろから支える。

「大丈夫？怪我はない？」

「…えっ！？あっはいっ！！大丈夫ですっ！！」

良かった、怪我はないみたいだ。
彼女は私から慌てて離れる。
もう少し触れていたかったのに……。

「あのっ…助けてくれて、ありがとうございましたっ」

「あははっ当然の事をしたまでだよー」

この子、かあいいなぁ…／／／

弛みそうになる頬をどうにか抑えて、微笑を浮かべる。
すると顔を真っ赤に染める女の子。
何故？

「一人じゃあ大変でしょ？手伝うよ」

「えぇっ！？いいんですかっ！！？あっ！でもっそ、そんな悪いですよぉっ！？」

「気にしないで。困った時はお互い様でしょ？…どうせ暇だし」

最後のところは彼女に聞こえないようにボソッと呟く。
彼女はうーんとかでもぉーとか呟いていたが

「わかりましたぁ、それじゃあお願いしますっ」

どうやら納得してくれたようだ。

「ドーン！と任されよっ！」

胸を張って、思いきり叩く。
ゴフッ！
力を入れ過ぎて急所に入って痛かった。
プッ…と吹き出す声がした。

見ると声を上げて、彼女は笑っていた。

「なにやってんスか、あはははっ」

少し恥ずかしかったが、私も釣られて笑った。

チラシ貼りは一通り貼り終わった。
休憩しようと事で、二人で自販機まで行くとスポーツドリンクを二本取り出し、一つを彼女に渡す。

「私の奢り」

「うぇっ！？いいんですか…？」

「うん、気にしないで」

「じゃあ、お言葉に甘えて…いただきますっ」

そう言うとスポーツドリンクを口に含む。
美味しそうにゴクゴクッと喉を鳴らし、一気に半分程飲み干した。
私はチマチマと飲む。
急に冷たいものを飲むと体調を崩しやすいからだ。
彼女の飲みぷりは見事で真似したくはあるが…。

「そう言えば、私、君の名前知らないんだよねー。教えてくれないかな？」

「あっ！あたし、ユイって言います。私も貴女の名前知らないです、教えて下さいよー？」

「私はユリア、霧島ユリアだよ。よろしくね、ユイちゃん」

「ユリア…？外国人みたいな名前ですねー。こちらこそよろしくです、ユリアさん」

「ユリアでいいよー。それに敬語も」

「はいっ…あっ！？うん…。あたしもユイでいいよ…」

「わかったよ、ユイ」

何故か耳まで真っ赤なユイ。

か　あ　い　い　／／／

その後、気になっていたさっきのチラシの事を聞くと、ガルデモと呼ばれる女子ロックバンドの話を永遠と聞かされる羽目に…。

途中、ユイを探しに来たガルデモのメンバーが来て、ユイを拉致っていた。

その時に岩沢やひさ子、関根や入江と知り合った。

音楽は一通りやった事があると言うと、是非今度練習に来てくれと

言われた。
それと今度、ライブやるから見に来てとも言われた。
なかなか可愛い子達が揃ってるねと言ったら皆顔を真っ赤にした。
何故だ？

◆ユイとガルデモとプレイガール？（後書き）

相変わらずの低クオリティいいいい
オワタ・・・ｏｒｚ
今回は改行してみました。
隙間が出来て見やすそう？
なにこれ分からない…

とりあえず、今後の更新の予定の間隔をば。
基本的に3、４日に一回の更新になりそうです。
長くて週に一回ですかね？
では、また次回ーノシ

◆守りたいもの（前書き）

予定より遅れてしまって申し訳ないです…
何故かこんな話にw

そう言えば、奏ちゃんの一人称って『あたし』『わたし』ですっけ？
何気なく『あたし』を使ってましたよ…。
どっちでも似合うのでいいんですけどねw

では、続編どーぞ。

◆守りたいもの

◆ユリア◆

「――ア…？」

ヒィ……ッ！！？

「『――様ぁーっ！！ゆりあを許して…ッ！！アアッ…嫌ぁ……ごめんなさい！！ごめんなさい！！ごめんなさい！！ごめんなさい！！』」

「――ア、ユリアッ！！」

ビクッ！？

ハッとして目を覚ますと、目の前に奏が居て私の顔を覗き込んでいる。

お月様みたいな綺麗な目だなぁ……最初に会った時もそう思ったっけ？

寝起きの頭でぼんやりそんな事を考えていると、

「大丈夫、ユリア？かなりうなされていたようだったけど？」

眉をハの字に寄せて、心配してくれる。

「……大丈夫だよ。もう大丈夫だから」

「……そう。ユリア、お風呂入って来たら？かなり汗をかいてるみたいだから。」

奏に言われて、その時初めて汗まみれになっているのに気付く。

うわぁ…物凄く汗だくじゃない…。

臭くないよねっ？ねっ？

それじゃあお風呂入ってくるねーと奏に伝えて、寮にある大浴場に行く。

この寮の大浴場は意外と広い。

一気に１００人入ってもまだ余裕がありそうだ。

この時間はそれなり人がいるが、今日は居ないようだ。

それに少しほっとしつつ、浴槽からお湯を汲んで体に掛ける。

それを何度か繰り返して、浴槽に入る。

熱くもなく温くもない程よい湯加減だ。

んっー…気持ちいいー…

ふにゃあと蕩けそうだ。

壁に背中を預けて、お湯に身を任せる。
しばらくそうしていると、浴場に誰か入って来た。
目を凝らしても湯気で全く見えない。
どうやら一人だけのようだ。
私と同じように湯編みして浴槽に入って来た。
その方向をじぃーと見つめる。
人影は私の方に近付いてくる。
少し警戒しながら様子を探っていると、その人物のシルエットが薄ら見えてきた。
もしかして？まさかっ…！？
「あたしも、お風呂入りに来た。」
その人物とは奏だった。
「えっ？奏？どうして…！？」
「ユリアがうなされていたから気になって、お風呂に入るの忘れてた。」

「そうだったんだ…。ごめんなさい、私のせいで……」
それを聞くと申し訳ない気分になる。
少しうつ向きながら喋る。
「貴女のせいじゃないわ。気にしてないから。」
「で、でも…」
「気にしないで。」
ありがとう、奏…と小さく呟いた。

◆奏◆

ユリアは明らかに落ち込んでいるように見える。
あまりにも、しおらし過ぎてユリアらしくない。
いつもは騒がしいくらいなのに…。
やっぱり、さっきうなされていた事に関係してると思う。
生きていた頃のユリアに何があったのか知りたい。

でも、あたしからは聞かない。
人には誰しも話したくない事があるから。
だから、ユリアが話してくれるまで待とう。
いつもは強がっていて、本当は寂しがり屋で心優しい女の子。
あたしはこの子を守りたい。

◆ユリア◆

奏に心配を掛けてしまった。
うーん、どうしたものか…。
あっ!?そうだ!!
昔、日本で聞いたやつをしてみよう。
「かなでっ!!!!あのっ…そのぉ…ううっ／／／／…い、一緒に洗いっこしようっ!!!!」
意外と恥ずかしかったっ／／／／
絶対、耳まで真っ赤だ…

あうあうあうあうぁぁぁ！！？？？！！！

ユリア、マジで涙目逃走５秒前――――。

――――１秒前。

「うん。いいよ。」

ユリア、フリーズ……。

――――数十秒後。

「マジで！？」

フリーズ解除。

「うん。いいよ／／／」

奏はうつ向き、少し顔を赤くしている。

やっぱりこれは自爆だぁぁぁ…

（以下、音声のみでお送りします）

「くすぐったいよっー！！かなでぇ！？」

「……／／／」

「って…あっ！…そこは…ッ！？んあっ？！だめだっていってるのにぃぃぃ／／／／」

「……っ♪♪♪」

「あははっ♪あはははははっ♪さっっっきは、よくもやってくれたねえっ？かなでちゃんっ？」

「……ダラダラ（｜＿｜；；）」

「うふふふふっ♪へへへへへっハァハァハァハァハァ」

「……ヤバイわ（・・；））））」

「かなでたんかなでタンかなでタソかなで（ｒｙ」

「……ガードスキル。ハンドソニック。」

「…グハッ！？か、かな…で……」

「……。」

ユリア、安らかに眠れ…。

◆守りたいもの（後書き）

本当に何を書いてるんだ、私は…ｏｒｚ

今回の話は、ユリアの生前の記憶がほんの少し出てきました。
残念ながら内容は出来てないですがｗ
多分、後々書くと思います。

今回はこのぐらいで
では、またーノシ

改行案…改実施です。
多分、見易くなったと思います。

◆ユリアと記憶無し男（前書き）

昨日投稿しようとして間に合わなかったです…ｏｒｚ

今回の話は、彼の登場です。

出そうか迷いましたが、やっぱりいるしょ！って事で出しました。

それでは、続編どうぞー。

◆ユリアと記憶無し男

◆ユリア◆

夜、いつもの散歩コースを歩いていると、

男の子が倒れていた。

グランドで

血だらけの

男の子。

ナニコレ　トッテモ　シュールw　デジャブヲ　カンジマスヨ？

あまりの惨状に驚きで片言になってしまった。

なんていうか、ホラー映画に出てくるゾンビみたいな？

というかこの刺し方…奏じゃないの？

最近、奏にいっぱい刺されたからよく分かる。

冷静に彼の身体中をチェックすると、心臓にブスッと深々と刺した後、抉って放り捨てたようだ。

奏ったら酷いんだよ？

私が校内で色々と悪戯してると何の前触れもなく現れて、心臓めがけてブッ刺していくのッ！！

いくら死なないからって痛いものは痛いのだよ……シクシク…（泣）

あっ話が逸れたね…

とりあえず彼を保健室に連れていて寝かした後、私も眠くなったから空いてるベッドに横になって眠ったの。

まさか、起きたらあんな事になる何て思ってもいなかったよー…（何処か虚ろな目で遠くを見つめる）

◆記憶無し男◆

俺が目を覚ますとそこは見慣れない部屋だ。

僅かに消毒液の臭いがするから多分ここは保健室か何かだろう。

ふっと昨日起きた事を思い出して、心臓を刺された辺りを触れる。

傷は無いようだ。

少しほっとしたのも束の間、目の端に入った赤く染まった何かを持ち上げる。

それは昨日着ていたであろう自分の血で真っ赤に染まったシャツだった。

声にならない悲鳴を上げてそれを地面に放り投げる。

この場から慌てて離れようと（破れているが無いよりはマシ）上着を羽織って部屋を出ようした時、

「お前か…ゆりっぺの入隊を断ったという奴は」

目の前に背丈くらいの長さの棒を振り回す男がいた。

尖端は刃物になっていてそれを俺の顔先に向けてそう言い放った。

「お、落ち着けよ？な？」

「死ぬか？」

「あーそれね。アハハ…それ死んだ世界のジョークね…面白「チミたち…うるちゃい…眠れないよぉ…」えっ？」

突然聞こえた澄んだ声に俺と男は驚き、そっちの方を見る。

俺が寝ていた隣のベッドから白いドレス？を纏った少女がまだ眠いのか目を擦りながら出てきた。

覚束無いフラフラした足取りで俺達の所まで来る。

そして、

「うるちゃいから静かにちて…まだ眠いの…」

「す、すいません…」

思わず謝ってしまった。

さっきまで交戦状態だったあの男も謝っていた。

「んっ？って貴様ッ！？あの時の！！！？」

この男は少女の事を知っているようだ。

まさか、コイツ等も変なヤツなんだろうか？

と思った俺は悪くない筈だ。

「……スー」

男の声に反応した少女はしばらく男の方を見た後、立ったまま寝息を立てて寝てしまった。

誰かが寝たまま寝れるって言っていたが本当だったんだな…

何て眺めていたのが悪かったんだろう。

「……ふっ…ふっざけるなッ！！百回死ねッ！！！！」

武器も持たない無抵抗な少女にいきなり逆上した男が武器を振り回す。

俺は少女に危ないと叫んだ。

◆ユリア◆

んー…ここは……あ、そうかー…保健室で寝てたんだった。

隣のベッドでは昨日拾った男の子がスヤスヤと寝ていた。

改めて彼を観察する。

なかなかのイケメン君ね…格好いい顔してる。

ふふっ今は寝顔が可愛いけどね♪

じぃーと彼を眺めているとまた睡魔に襲われて、それに従いそのまま目を瞑った。

声がしてぼんやりと目が覚める。

中途半端に起きたからまだ頭は覚醒していない。

その時に何を言ったのかはっきりと覚えていない。

確かうるさい、眠いだった筈……。

そのまま声にした方に向かって、同じ事を言って…ダメだ…ここか

ら先の記憶は覚えてない…。

◆記憶無し男◆

彼女はあの男の攻撃を避けると、ガードが甘い隙だらけの所に百裂拳を見舞って倒した。

フラフラと倒れそうになった少女を抱きしめると、俺の腕の中でスヤスヤと眠っていた。

顔を見つめると、さっきまでの凄まじい戦闘を行った女の子とはとても思えなかった。

彼女をベッドに寝かせ、立ち去ろうとすると裾を掴まれた。

見てみると少女は俺の裾を掴んだまま寝ていて何処に行くの？って言っているような気がした。

俺は少女の頭を撫でてやると、くすぐったそうに身動きして気持ち良さそうにしていた。

それでも手を離そうとしない。

仕方なく近くにあった椅子を引き寄せ、それに座る。

彼女が起きるまで待つか。

そう思っているといつの間にか俺は眠っていた。

◆ユリア◆

「……」

どういう事なの？

昨日拾った男の子が私の寝ているベッドの脇の椅子に座っていて、うつ伏せで寝ている。

まあ、それはいいよ？

それくらいなら私も許そうと思う。

でも、ちょっと待とうか？

なぜ、君は私の胸を枕代わりにしているの？

なぜ、君は私の胸を鷲掴みしているの？

なぜ、君はそんなに幸せそうな顔しているの？

「キャアアアアアアアアァァァァァ！！！！！？？？」

全てを悟った時、全身全霊を込めた学校内に響き渡るであろう、この世界に来て最大級の悲鳴を上げた。

彼は私の悲鳴に飛び起き、なんだッ！？って感じで辺りを見回した後、私に気付いたらしく今の悲鳴はお前か？って聞いてくる。

私が黙っているのに不審に思ったのか肩に手を置いて呼び掛ける。

「お、おい！大丈夫か？」

ビクッ！？

「さ、触らないでッ！！この変態ッ！！！！」

手を払い退け、胸を腕でガードしてベッドの隅まで後退して距離を取る。

「なっ！？俺は変態じゃない！！」

手を伸ばそうとする腕を避け、枕を全力で投げる。

彼の頭に当たって若干怯むが、所詮は枕。

「痛ッ！？な、何しやがるんだ！！？」

「うるさいッ！！変態ッ！！私に触れるなッ」

羞恥と怒りで顔は真っ赤に染まっているだろう。

「俺は変態じゃ「じゃあ、さっきまで私の胸で寝ていた事、胸を鷲掴みにしていた事、顔がいやらしかった事について弁明は？」そんな事俺はしてな「証拠はあるよ」んな！？そんなの嘘「はいっ写メ」

……」

圧勝っ♪

こんな事もあろうかと写メ撮ってましたぁー

「それで言いたい事は？」

「……すいませんでした」

彼はＤｏ・ｇｅ・ｚａで頭を下げた。

よし、許そう♪

そんなこんなでひたすら謝る彼を許して、自己紹介。

「私はユリア、霧島ユリアだよー」

「俺は……お、音無…」

「下は？」

「思い出せない…」

「ふーん…君は記憶が無いパターンなんだね…」

「よくある事なのか？」

「さぁ？私も詳しくは知らないよ」

彼は記憶喪失のようだ。
後で奏に聞いてみるかな。
何かしら知ってると思うし…。
「さてと、どうしようか？」
「何が？」
「ここは死後の世界だって聞いてると思う。それで君はどうしたいの？この世界に来たって事は、生きてた頃に何かしらの未練があったって事になるんだよ。まあ、今のところ君は記憶喪失みたいだけどねー」
「……」
「とりあえず、着いて来てよ？お腹空いたし、今後の事も…ね？」
「今後の事……？」
「あはっ♪えっちぃ事した責任は取って貰うからねー？」
顔が青ざめてく音無君。
フフフッと不敵に笑う私。
保健室は異様な雰囲気が渦巻いていた。

◆ユリアと記憶無し男（後書き）

相変わらずのグタグタ感…

保健室→女の子と二人きり→えっちぃ事…

こういう発想しか浮かばんかったｗ

記憶無し男くんこと、音無の登場です。

ぶっちゃけると奏たんの敵だから釘バッドで音ｎを撲殺したい…ハァハァ（ｒｙ

ちなみにユリアの胸はＤカッ（うわなにをするやめｒｙ

今日はここまでー

では、また次回ーノシ

追伸：諸君、えっちぃのは男のロマンだ！お母さんには内緒だＺＥ☆

友人に洗脳されてしまった…ｏｒｚ

◆あれって兵器…だよね？（前書き）

皆様、お久しぶりです。

話の構築に頭を悩ませていました。

行き当たりばったりの突貫工事並の適当さですけどねｗ

とりあえず、続編どうぞー。

◆あれって兵器…だよね？

◆ユリア◆

音無君を事務室へ連行し、奨学金を貰いに行く。

私達にとって奨学金はお小遣いの様なものだ。

その後、男子寮で音無君の部屋を準備して貰った。

「それじゃ、晩ご飯食べに食堂に行こっか？」

「あぁ…でも、死んだ後の世界でも腹は減るんだな」

「あはは…食べなくても死にはしないけどねー…干からびるけど……」

あの時は辛かった。

奏に刺されて死んだ方が楽だと何度思った事か…。

もう、アレは嫌…（泣）

食堂に着くと既に列が出来ていた。

相変わらずの混み合いぷりだ。

人数は多いけど、そこまで時間は掛からないんだよね。
食堂のおばさんに注文したら、一瞬で熱々の料理が出てくるし、レンジでチンのスピードじゃないよ？
まるで生肉が一瞬でこんがり肉に変わるようなものなんだよ？
って私は何を言ってるの？

あっという間に出来たラーメン定食（ラーメン、炒飯、餃子ｏｒ春雨、杏仁豆腐）を受け取って、席を探す。
音無君と合流して空いてる席に座った。
音無君は『激辛麻婆豆腐』を取ったようだ。
明らかに辛そうで毒々しい程に真っ赤だ。
見ているこっちが自然と汗が噴き出してくる。
食べた事のある者しか分からないあの辛さ。
アレのせいで、しばらく味覚が戻らなかった。
音無君も恐る恐るレンゲを伸ばし、激辛麻婆豆腐を口に入れる。
やっぱり想像通りの反応を示してくれた。
口から火が上がっている。

顔と口が真っ赤だ。
水を注いで渡す。
彼は水を受け取るとゴクゴクッとがぶ飲みして肩を大きく揺らして荒い息をしている。
「だ、大丈夫？」
「あぁ…もの凄く辛い…でも、美味いな……！」
涙目になりつつ、そう答えた音無君。
あははと苦笑しながら私も賛同して頷く。
凄く辛くて失神しかけたけど、美味しいんだよねー…
だからと言ってもう一度食べたいとは思わないけど。
何を思ったのか音無君がレンゲを激辛麻婆豆腐を私に差し出してきた。
「ユリアも食ってみろよ？美味いぞ？」
「エ゛ッ！？私は遠慮するよー…」
「遠慮するなって。俺が食わしてやるよ…ほら、あーんだ」
なにこのラブコメ主人公のようなシーン…

この『麻婆豆腐』じゃなければ食べて…ごほん、なんでもない。
私は全力で断った。
意地でも食べさせようとする音無君に、
「…強引なのはよくないわよ。」
いつの間にか現れた奏が絶対零度の眼差しを音無君に向けてそう言った。

◆奏◆

「か、奏っ！？生徒会の仕事は終わったの？良かったら一緒に食べよっ！？」
ビクッと驚いて何処かほっとした様な表情を見せるユリア。
「うん、分かった。仕事も一通り終わったから大丈夫。」
それを聞いたユリアは仔犬のようなウルウルした目から満面の笑顔を浮かべる。
ユリアはズルい…。
今日は授業に出てなかった事と昨日は寮の部屋に帰って来なかった

事をＯＨＡＮＡＳＨＩしようと思ったけど止めた。

そんな彼女を見ていたら叱れなくなった。

話を聞いてみる必要があるわね。

隣の男子生徒にも…。

その時に奏を見掛けた数人の生徒達は見た事のない黒い笑みに怯えたとか。

その後、ユリアの悲鳴が聞こえたとか聞こえなかったとか。

彼女達のテーブルの上には『麻婆豆腐』が置かれていた。

◆あれって兵器…だよね？（後書き）

『麻婆豆腐』に逃げましたｏｒｚ

あれは兵器だと思う。

一応ＴＶ版主人公、音無を出しましたが

何故でしょう？

私自身が書いてて、殺意が沸きましたｗ

キャラも好きな筈なんですが…あれ？こんな筈じゃあなかったのに…。

とりあえず、今回はこの辺りで

では、また次回ーノシ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1506u/

Angel Beats! とりあえずやってみるきゃないしょっ!!

2011年10月9日02時42分発行